

日本文学

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第123号 令和6年(2024)10月1日

資料見聞

河田小龍 しやうりやう

《西江春望》 せいしやうしゅんぼう



（墨書部分拡大）

高知市にある五台山の南側の麓、浦戸湾を望む「吸江」は、古くから土佐の景勝地として知られ、「吸江十景」が選ばれるなど人々に親しまれてきました。特に、幕末から明治初めにかけては、多くの絵師が吸江を画題としました。同時期の土佐を代表する絵師、河田小龍もその一人で、吸江を繰り返し描いています。本作もそのうちの一点ですが、「昨年、所蔵者の方から当館へ連絡をいただいたことがきっかけで初めて確認された、新出資料です。画面左に、小龍自身による「西江春望」の墨書があります。西江は中国南部の河川の名前です。なぜ吸江の風景に西江の名がつけられているのでしょうか。

実は、吸江という地名は、文保2年（1319）、土佐を訪れた臨済宗の高僧、夢窓疎石（1275～1351）が名付けたといわれています。その背景には、「一口に吸尽す西江水」という禅語があると考えられます。一口で西江の水を飲み干せるほどに自分自身が空っぽ、つまり「無」でなければいけないという、禅の基本的な姿勢を表した言葉です。吸江寺には、小龍が描いた夢窓の頂相（肖像画）が残されていることから、小龍にとって吸江は思い入れの深い場所なのだろうと想像していました。そして、今回新たに見つかった本作品の「西江春望」という墨書によって、小龍が夢窓に始まる吸江の歴史をきちんと認識していたことがうかがえ、改めて吸江と小龍の深い関係に気づかされました。

（那須）

企画展 3館連携企画 生誕200年 河田小龍

那須 望

幕末から明治初めの激動の時代を駆け抜けた土佐の絵師、河田小龍の生誕200年を記念して、当館、県立美術館、県立坂本龍馬記念館の3館が連携し、この秋、「河田小龍展」を開催します。

■絵師、河田小龍とは

河田小龍（文政7（1824）年～明治31（1898）年）は、高知城下浦戸町（現在の南はりまや町）に生まれました。土佐で南画家、島本蘭溪に師事したのち、京都に出て狩野永岳に狩野派を、中林竹洞に南画を学んだほか、儒学を土佐の岡本寧浦、奥宮慥斎らに学びました。アメリカから帰国した中浜万次郎（ジョン万次郎）の聞き取りを行い、絵入りの記録『漂異紀畧』を記したことも知られています。土佐の町絵師、絵金とは師弟に近い関係にあり、絵金が大成した芝居絵屏風を小龍も手掛けました。

幕末期には国事に奔走し、明治に入ってから官吏として書記掛、内国博覧会事務掛などの仕事を歴任。晩年は京都に移住し、京都府知事、北垣国道の依頼を受けて琵琶湖疏水工事の過



河田小龍《横幀（義経千本桜、加賀見山旧錦絵）》（部分） 当館蔵

程を記録した図誌『琵琶湖疏水図誌』を制作しました。また九州の名勝・耶馬溪を妻の照とともに旅し、その風景を集めた『客豊図志』を描き上げ、広島では日清戦争の大本営において、明治天皇の御前で揮毫を行うなど、晩年まで精力的に活躍。端正で着実な筆致による人物画や、鋭い観察眼に基づく数々の作品やスケッチで知られるほか、襖絵や絵馬など人々の生活とかわる絵画も多数手がけました。後進の育成にも尽力し、高知、京都、広島で近代美術の担い手を育てました。

■代表作がない！？

これだけ精力的に活躍した小龍ですが、「代表作は？」と聞かれると答えに困ってしまいます。というのも、高知県内で調査していると、小龍作品をお目当てに訪れたわけではないお寺や神社、個人宅など、あちこちで小龍作品と出会うことがあります。しかも、画題は山水画、動植物画、歴史画、仏画、神仙画など幅広く、形状も掛軸のみならず、板絵や絵馬、小襖絵、屏風など様々です。その上、どの作品も「やっぱり小龍は上手いなあ」という感想が漏れ出るほどの仕上がります。

土佐を代表する絵師として、小龍とも関係の深かった絵金は、一度見たら忘れられない鮮烈な芝居絵屏風が代名詞ですが、小龍にはそのような「代表作」はありません。

しかし、代表作がないことが小龍の特徴といってもいいほど、小龍は同時代の絵師のなかでは群を抜いて多くの作品を生み出しています。

なかにはお礼や祝いの品として短時間で大胆に描き上げたと思われる作品もあれば、注文に誠実に応じて緻密に構想を練り仕上げたと考えられる作品もあります。どれをとっても絵師、小龍の魅力を感じる作品です。

■暮らしを彩ってきた小龍作品

そんなたくさんの小龍作品のなかから、当館では、土佐の人々とのつながりのなかで生み出され、今日まで守られてきた作品を紹介します。

例えば、掛軸は、景色や季節を屋内へ取り入れる役割を果たしました。



河田小龍《七福神図》 当館蔵



河田小龍《ひな人形図》 坂本龍馬記念館所蔵

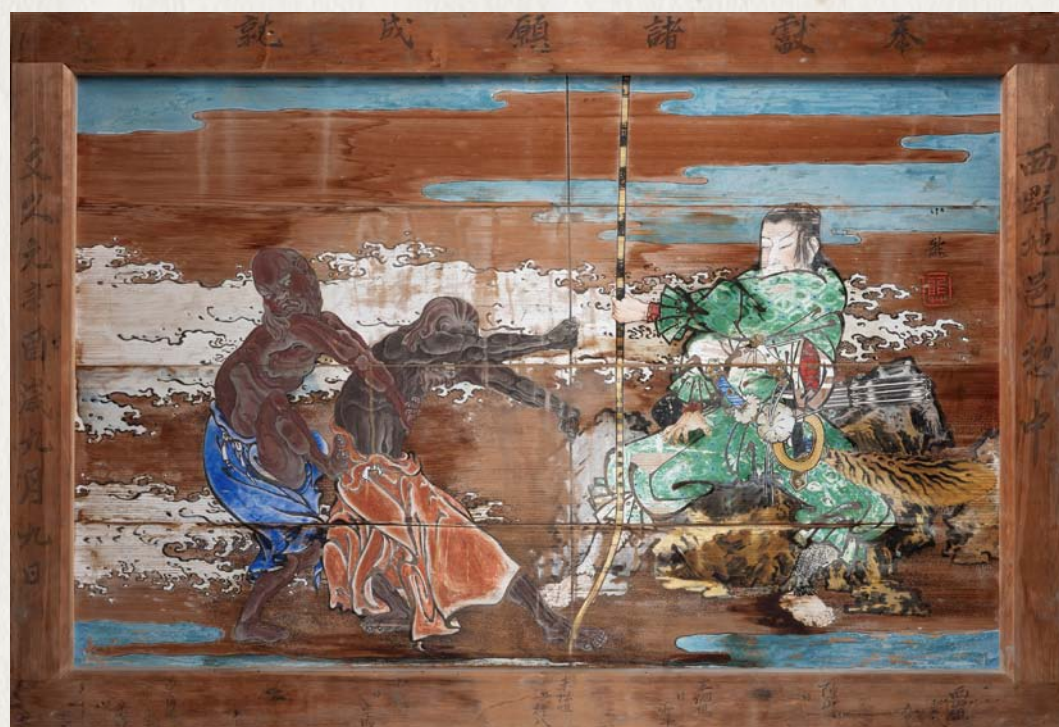
表紙で紹介した吸江が画題として好まれたのも、景勝地を生活空間にも取り入れたいという要望が多くあったからではないでしょうか。

季節や好みに応じて掛軸をかけ替え、暮らしに彩りを添える…。しかし、現代は床の間がなくなり、掛軸は家での居場所がなくなってきたように思います。また、屏風や襖絵、衝立なども日本間を区切る建具としての用途を失い、生活から切り離され、美術品として楽しまれています。



河田小龍《小襖「楠公図」》 芸西村文化資料館所蔵

太平記の名場面、桜井の別れを描いた小襖。1336年、湊川の戦いの前に、楠木正成・正行父子が、西国街道桜井駅で今生の別れをする場面。



河田小龍《絵馬「鎮西八郎為朝図」》 南国市祈年神社所蔵

平安時代の武将、源為朝は、怪力の持ち主で弓術に秀でたという伝説的な英雄。縦120cm、幅180cmを超える迫力ある大絵馬。

本展では、掛軸や屏風のほかに人々の無病息災などの願い、祈りが込められた絵馬なども紹介します。本展が展示である以上、これらの作品を「本来あるべき場所や用途」から「切り離している」という矛盾を感じないわけでは

ありません。

しかし、本展で紹介する小龍作品を通じて、その背景にある土佐に生きた市井の人々の暮らしや願いに思いをはせていただける機会になればと思います。

(那須)

3館連携企画 生誕200年

河田 小龍

歴史民俗、坂本龍馬、美術それぞれの専門性をもつ3館が連携して開催します。

龍馬に世界を教えた男

会場：高知県立坂本龍馬記念館

会期：10月23日(水)～12月15日(日)

『漂異紀略』をはじめとする資料によって土佐藩随一の教養人でもあった小龍の姿を紹介します。

《漂異紀略(大津本)》 坂本龍馬記念館寄託



土佐の人々のつながり

会場：高知県立歴史民俗資料館

会期：11月1日(金)～令和7年1月5日(日) ※12/27～1/1休館

人々の暮らしを彩ってきた掛軸や屏風のほか、絵馬などの小龍作品を紹介します。

河田小龍筆《捕鯨図下絵》(部分) 当館蔵

激動期への眼差し

会場：高知県立美術館

会期：11月9日(土)～令和7年1月5日(日) ※12/27～1/1休館

幕末期と明治期に分けて、小龍の画業の全貌を俯瞰します。

河田小龍《琵琶湖疏水絵図》 明治23年(1890) 個人蔵



歴史×美術館×龍馬館

特別企画

関連企画

記念講演会「舞台は回る、激動の時代の美術(仮題)」

日時：12月7日(土) 13:30～15:00 講師：木下直之氏(静岡県立美術館 館長)

会場：高知県立坂本龍馬記念館 新館1階ホール 定員：50名(先着順) 聴講無料

申込方法：11月1日(金)より受付を開始します。県立坂本龍馬記念館まで電話(088-841-0001)等でお申込みください。

龍馬館 クロストーク

日時：11月17日(日)

14:00～15:00

会場：高知県立坂本龍馬記念館

新館1階シアターコーナー

講師：上本竹永氏、龍馬館学芸員

絵画だけでなく、漢詩などの文学にも強い関心を持っていた、小龍というマルチ画人の魅力をお伝えします。

※当日会場に直接お越しください(参加無料・要入館券・事前申込不要)

美術館 サタデーレクチャー

「河田小龍の絵画作品の変遷—変転する時代の視覚—」

日時：11月23日(土・祝)

10:30～12:00

会場：高知県立美術館 1階 講義室

講師：中谷有里(美術館主任学芸員)

小龍が生きた幕末維新时期は人々の物事の見方(視覚)が大きく変化した時代でした。小龍の作風の変遷から、それぞれの時代の視覚を読み解きます。

※参加無料・事前申込不要

学芸員による展示解説

●龍馬館11月16日(土)、

12月14日(土) 各日14:00～

●歴史館11月23日(土・祝)、

1月3日(金) 各日14:00～14:30

●美術館11月9日(土)、12月4日(水)、

12月15日(日) 14:00～

※11月9日(土)は3館の担当学芸員による合同展示解説を行います。その他の日程は各館の学芸員が解説します。

※いずれも参加無料・要観覧券・予約不要。当日直接、各小龍展会場にお越しください。

「西南四国の中世社会と公家」企画展調査 その2

鎌倉時代の京都と西園寺家

副館長 松田 直則

■中世の公家

平安時代の公家は、政治・文化の中心で、歴史ドラマでもその様子を垣間見ることが出来ます。中世になると政治の中心が鎌倉に移ることから京都の公家の様子が見えにくいです。今回の企画展導入部分である西南四国に下向した西園寺家と一条家のルーツ探りと展示資料調査のため、曾我学芸員と京都に行ってきました。



写真1 持明院殿跡

鎌倉時代の京都研究の現状に対し、近年考古学からのアプローチで中世京都の姿が少しずつ見え始めてきました。同志社大学今出川校地付近に、持明院殿跡（写真1）が所在しています。持明院は、鎌倉時代に後鳥羽上皇の兄にあたる後高倉院が住んだ院の御所で、南北朝時代には北朝の拠点となった重要な施設です。この持明院御所に面す

る東西方向のメインストリートの脇にあった溝が、同志社大学の発掘調査で発見されました。この重要な持明院大路と呼ばれる場所付近に、鎌倉時代の京都で最高権力を持つ人物が関連する人々を集めて住んでいたようです。その人物こそが、関東申次として鎌倉幕府と強いつながりを持った西園寺公経です。

■西園寺公経の居宅と別邸

同志社大学の一連の発掘調査で、鎌倉時代の京都の中心が同志社大学周辺であったという新しい視点が注目され始めました。大学のある今出川通の南側にあたる一条通北側には、西園寺家や九条・一条家の居宅が隣接してあったと推定されています。公経は、その他に別邸も持っており、それは京都大学の付近にある吉田泉殿です（写真2）。泉殿とは、池を配した庭園をともしなう殿舎を指してひろく使われる用語であり、吉田に所在するそのような屋敷と理解されています。さらに公経は、西園寺と山荘を現在の金閣寺（鹿苑寺）となった場所に造営しています。金閣寺の前身は、足利義満の北山殿が



写真2 西園寺氏の別邸 吉田泉殿付近に建つ石碑

有名ですが、その前には強大な権力を有した公経がその財力でもって山荘北山第を造営し、その後義満が西園寺家から譲り受け北山殿を造営しているのです。公経は、この山荘北山第に「安民沢」と呼ばれる池を作っています（写真3）。安民沢は東西約80m、南北約40mの大きさがあり、東寄りに白蛇塚と呼ばれる中島があります。白蛇塚の上には、五輪塔の笠を5段重ねた石塔が建っており、今でも金閣寺を見て安民沢を通る観光ルートになっています。中世京都の中心に居宅を構え、吉田泉殿や北山第などの別邸や山荘を造営するなどその財力はいかほどのものであったのか、またその手法を考えた時、宇和荘も含め瀬戸内や九州の流通拠点をおさえた公経のもくろみが見えてきます。

■九条家と一条家

一条氏の祖である九条家は、藤原北家嫡流の藤原忠通の六男である九条兼実を祖とします。兼実の息子の九条良

経が摂政となっており、九条家の摂関家としての地位を確立しています。その息子である九条道家は、九条家の菩提寺として東福寺を建立していることで有名ですが、本坊庭園（方丈）や通天橋は観光の名所となっています。道家は、西園寺公経の娘を妻として迎えており、その子は鎌倉4代将軍となった三男の頼経です。その四男の実経が一条氏の祖となっており、西園寺家や九条・一条家そして鎌倉幕府との関係が見えてきます。幡多荘も、当初は九条家が荘園領主でしたが、建長2年（1250）に一条家が譲渡されています。西園寺家や一条家が西南四国に下向してまでも、この領地を守ろうとした理由が少しずつ見えてきたように思います。



写真3 金閣寺（鹿苑寺）の安民沢

レポート

企画展「秘められた神と祭り」

梅野 光興

令和6年度夏の企画展「秘められた神と祭り」は、あまり知られていない県内の祭りを取り上げるとい、博物館としては冒険的な内容だったので反応が心配でしたが、「知らない祭りを知ることができて勉強になった」「(通常展ともに)時間を忘れてしまうほどのめりこんでしまいました」「高知の神事・風習などについてもっと見たい！」などと好評だったようです。

あまり実物資料が無い「祭り」の展示だったため、今回は大型写真パネルを作成し、パネルが主役になるような展示構成にしました。また、担当者が撮影した動画を会場に流したことも「分かりやすく楽しめた」と好反応でした。

加えて、学

芸員による「調査」が透けて見えやすいのも今回の企画展の特徴であり、狙い



でした。「年に何回もあるわけではない行事のことを、企画展示まで、どのくらいの期間かかったのだろうとお願いしながら見させていただきました」このアンケートには、その狙いがしっかりと届いていたことを感じました。

「この伝統が今後も廃れることなく受け継がれていってほしい」「四国の他地域との比較も見てみたい」などの反応も期待通りで、担当者としてはシメです。

また本企画は、県立文学館「ムー展」、県立美術館「MUな映画」との連携企画で行われました。

博物館実習を終えて

学芸課長 亀尾 美香

当館では毎夏、学芸員資格の取得を目指す博物館実習生を受け入れていきます。今年も四名の学生が七日間の実習をこなしました。

博物館実習の内容は館によって異なりますが、当館では施設見学や館の経営・管理業務の説明に始まり、学芸の各専門分野(考古・歴史・民俗)、資料保存のための環境整備、教育普及、広報など多岐にわたります。今回の実習生は、初日(8月18日)がちょうど月に一度の民家の火焚きの日に当たっていたことから、暑さをがまんして囲炉裏にあたる経験をしてもらいました。便利な着火具を使わず、昔ながらの火打ち石で火を起こす様子を間近で見る機会はめったになく、「よい経験をしました」と日誌に書いてくれた実習生もいました。

また、実習期間中には教育普及事業であるサマーミュージアム(8月24日)があり、実習生には前日の準備作業から参加してもらいました。子どもたちがワークシoppで作った作品を、嬉しそうに実習生に見せに来る場面もありました。

今回は他にも、企画展の図録等に掲

載する資料写真をプロのカメラマンが撮影する現場や、重要文化財等を展示する際に基準となる展示ケースの有害ガス調査、燻蒸庫燻蒸作業などにも立ち会ってもらいました。年に数回しかない作業をたまたま実習期間中に実施したこともあり、通常の博物館実習ではなかなか得られない貴重な経験を実習生に提供できたのではないかと自負しています。

学芸員資格は大学等で所定の単位を取れば取得できますが、もちろん資格を取った人全てが学芸員になるわけはありません。学芸員を目指すにしても、依然として採用枠は決して多くないのが現状です。たとえ学芸員にならなくても、実習を通して博物館への理解を深めてもらい、将来博物館の応援団になつてもらえたら、実習を受けてもらった意味は十分あると思っています。





コーナー展 干支の玩具 巳

12月6日(金)～令和7年1月19日(日)

来年の干支「巳」にちなんで蛇の郷土玩具を展示します。蛇を気味悪がる人も多いですが、そこはおもちゃですから、かわいらしくしようとする作り手の気持ちがうかがえます。例えば高知県の安芸土鈴には、ウインクした姿がかわい蛇がいます。

白蛇なのもミソです。蛇は、山の神やその使い、稲作を司る水神などとして信仰されてきました。稀少な白蛇は、とりわけ信仰の対象となり、郷土玩具には、白蛇率が高いです。

また、蛇は財運や商売繁盛の利益があるという弁財天の使いとされ、香泉人形の土鈴には宝尽くしの巾着にとほけた表情の蛇が巻き付いているものがみられます。これらの土佐物をはじめ全国の蛇玩具を郷土玩具収集家、山崎茂氏寄贈コレクションから選りすぐって展示します。お楽しみに！



安芸土鈴(高知県)



香泉人形(高知県)



第12回 旧大栃高校 民俗資料一般公開

今年も、令和6年11月9日(土)・10日(日)に、香美市物部町の旧大栃高校を一般公開します。

当館が収集してきた民具コレクションを大公開。農林漁業をはじめ、さまざまな民具を一気に見ることができるチャンスです。

地元・物部の民話やいざなぎ流など、特徴ある地域文化も紹介、昨年好評だった大栃巡りの第2弾も予定しています。

10時～16時。入場無料。(梅野)



第19回岡豊山フォトコンテスト 作品募集中!!

「岡豊山の春夏秋冬」をテーマに、岡豊山の写真を大募集！ 最優秀賞、優秀賞、スマホ大賞に加え、各種特別賞を選びます。応募作品は館内で展示(11月23日(土・祝)～令和7年1月26日(日)予定)するとともに、応募作品の一部を掲載したオリジナルカレンダーも作成する予定です。

写真撮影が好きな方、これから写真を撮ってみたいと思っている方、カメラ片手に季節の訪れを感じる岡豊山へ足を運んでみませんか。たくさんのご応募をお待ちしております。

- 募集期間：10月31日(木)17時迄
 - 募集内容：岡豊山で撮影した・岡豊山を撮影した写真で未発表の作品(一般部門 1人1点、ケータイ・スマホ部門 1人2点まで)
 - 応募方法：高知県立歴史民俗資料館に持参または郵送いただくか、HP・QRコードのメールアドレスからご応募ください。
- ※詳細は、HP、チラシ等でご確認ください。(総務事業課)



▲「秋日和」島元慶子(第18回最優秀賞)



岡豊城跡は面白い!

8月22日(木)、城郭研究者である滋賀県立大学名誉教授の中井均先生と芸能界きってのお城マニア・落語家の春風亭昇太さんが、当館副館長の案内で岡豊城跡を散策されました。

詰から三ノ段へのルートが喰い違いになっていることや、礎石建物がどのようなものだったか、門はどこにあったか、など遺構を見ただけで色々な見解が出てきて、傍で聞いていてもどんどんイメージが膨らみました。岡豊城跡の見どころのひとつである畝状堅堀群を見て、「おお！」の声が。お二人が「岡豊城、面白い」と言ってくださり、私たちも史跡の保存はもちろんのこと、面白さを発信していなくてはと思いました。このあと秋冬は山城攻略のベストシーズン。ぜひ、御来城ください。(総務事業課)



前田博史天然写真展2024 「いろはのいろ」

10月12日(土)～21日(月)

会場：2階エントランスホール (本写真展は無料でご覧いただけます。)

美しい日本の秋を一足先にお観せします。
見惚れるブナやメタセコイヤの黄色に、楓の赤色、七色のチガヤなど紅葉が高揚するひとときをご堪能ください。



企画展 3館連携企画 生誕200年

河田 小龍

—土佐の人々とのつながり—

11月1日(金)～令和7年1月5日(日)

幕末から明治にかけて土佐で活躍した絵師、河田小龍の生誕200年を記念して、高知県立坂本龍馬記念館、高知県立美術館と連携して開催します。

小龍は、暮らしのなかで用いる掛軸、衝立、屏風、襖絵や神社に奉納する絵馬も描いています。例えば、掛軸は床の間に飾り季節や景色を屋内に取り込む役割を果し、衝立や屏風は広い日本間の空間を仕切る建具として楽しまれてきました。また絵馬には、豊漁や無病息災など、市井を生きる人々の願いが込められています。当館では、土佐の人々の暮らしと密接につながりながら生み出され、今日まで守られてきた小龍の作品の一端を紹介します。

第12回 旧大栃高校民俗資料一般公開

11月9日(土)、10日(日)

会場：旧大栃高校(香美市物部町大栃1926)

香美市物部町の旧大栃高校に保管している当館所蔵の民俗資料約2千点を特別公開します。併せて、物部の民話と歴史や、いざなぎ流の紹介コーナーも設けます。

コーナー展

干支の玩具 巳

12月6日(金)～

令和7年1月19日(日) 大山竹蛇(神奈川県)

山崎茂さんの郷土玩具コレクションを中心に、来年の干支、巳にちなむ日本各地のヘビの郷土玩具を展示します。



民家で囲炉裏の火焚き

10月20日(日)、11月17日(日)、12月15日(日)

岡豊山歴史公園に移築した茅葺屋根の山村民家で、毎月第3日曜日9時半からお昼前まで、いろりに火をいれます。ご参加お待ちしております。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第123号
令和6年(2024)10月1日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11
TEL 0888(866)22211
FAX 0888(866)22110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館することがあります
観覧料 (通常展)大人(18才以上) 470円
(通称展)大人(18才以上) 370円
(企画展)常設展示込み 520円
団体(20名以上) 420円
※特別展は別に定めます
無料…高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳
所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者
保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所
持者とその介護者(1名)
印刷：川北印刷株式会社

<https://www.kochi-rekimin.jp>

Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

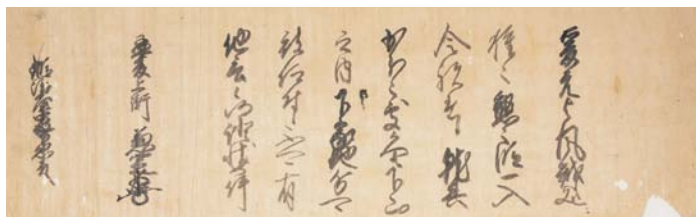
予告

次回企画展

西南四国の中世社会と公家

令和7年2月28日(金)～5月6日(火・振)

土佐の一条氏と南予の西園寺氏。いずれも京都から下向し、公家から武家へと変貌しました。両者をあわせて、また対比することで、西南四国、中世社会の様子と変容を浮かび上がらせま。政治・経済・信仰の各面においてかれらは西南四国に何を求めていったのでしょうか。また、長宗我部元親の四国制覇に向けた動きの中で、生き残りをかけた四国の西南部の国衆(有力武士)たちの動きにも迫ります。



一条兼定宛行状(愛媛県歴史文化博物館蔵)

本展覧会は、
令和6年12月17日から
令和7年1月26日まで、
愛媛県歴史文化博物館で先
行して開催し、続いて高知会
場の当館で独自に資料を加
えて開催します。

木造南仏上人坐像
高知県保護有形文化財
(四万十市郷土博物館蔵)

